

〈論文〉

赤をめぐる一考察
— 慣用表現から見る言語的世界像の日露比較 —

岩 本 眞 樹

1. はじめに

本稿では、日本語とロシア語における色彩語「赤 (い)」及び「クラスヌイ красный」を構成要素に持つ慣用的な表現に注目し、それぞれの特徴や意味傾向を明らかにすることを目的とする。ここで対象とするのは、慣用句 (фразеологизм) やことわざ (поговорка)、成句・言い回し (поговорка) などとする。日露のこの二つの語「赤 (い)」と「クラスヌイ」は、色彩語の意味としては対応することばである。しかし、それぞれの語の使用者が色を用いて表現するとき、そこにこめた意図、予測、期待は全く同じとは限らないはずである。同じ文化にいる人々の間には色への共通の認識と共通のイメージによる独自の尺度があり、そこには、その文化固有の現実が反映されているのではないだろうか。異なる民族・文化を背景として色も異なった概念を派生的に獲得していることが考えられる。

私たちは具体的なことだけでなく抽象的なことにも、その様子を生き生きと表すために色彩語を用いている。しかし、他の国の文化で、ある色がどのような役割を持つのかを正しく知っているだろうか。最近、中国人留学生から「中国人の男性には緑の帽子はプレゼントしないでください。」という話をきいた。現代中国では、緑の帽子は「奥さんに逃げられた男性」という意味があり、タブー色となっているという。それぞれの文化にはこのようなタブーや禁止となるファクターが日常の中に暗黙の了解となつて組み込まれていることがあり、時には異文化間コミュニケーションの妨げとなる可能性さえあるだろう。

ソローキンは「ある特定の文化に固定された、感情や状態と色彩語との結びつきを見れば、色彩語を一種の『世界観の概念』『言葉によるライトモチーフ¹』と見なすことができる。」

1 オペラ・標題音楽などで、特定の人物・理念・状況などを表現するために繰り返し現れる楽節・動機。

(Сорокин [1988]: 50) と述べた。民族、文化、そして言語も異なる日露における「赤」というひとつの色彩語を持つ慣用表現に現れた概念を比較することで、それを母国語とする人々の言語的世界像 (языковая картина мира) の一端を確認できると考える。

言語と文化、言語と思考プロセス、言語と世界知覚の相互作用の研究はロシアにおいて大きな関心を持たれており民族心理言語学、認知言語学、言語文化学の主要な研究のテーマとなってきた (Сорокин Ю. А., Марковина И. Ю., Крюков А. Н., Залевская А. А., Белов А. И. など)。ソローキンは「エトノス—言語—文化」の3要素の分析により、言語文化共同体の内にあり、その心理的・非心理的行動をコントロールしている固有の「言語的世界像」を形成する深層構造について説明することができると述べている (Сорокин [1988]: 3)。

色彩語が表す種々の概念や象徴、その比較対照に関する研究はロシアでも日本でもこれまでに非常に多くなされてきた (Бахилина Н. Б. [1975], Фрумкина Р. М. [1984], Кульпина В. Г. [2006], Лебедева Г. Н. [2011], Праченко О. В. [2003], Вардзелашвили Ж. А. [2009], Кудрина А. В., Мещеряков Б. Г. [2011], 蘇紅 [2013], 唐 向紅・鷺尾紀吉 [2012], 三星宗雄 [2017], 森宏子 [2017] など)。しかしロシア語と英語、又はロシア語と中国語、日本語と中国語、日本語と英語を対象としている研究に比べ、「日本語とロシア語」を比べたものは少ない。そのため本研究は新たな視点のひとつを提示することができるのではないかと考える。

2. ロシア語と日本語の色彩語「赤」の歴史

2-1. ロシア語と日本語の「クラスヌイ」「赤 (い)」の語源

まずは、ロシア語と日本語での語源について触れよう。

語源辞典によれば、ロシア語の赤を表す形容詞「クラスヌイ」は、古代スラブ諸語において «краса 美・美しさ» を表すことばに由来し、本来の意味は「美しい красивый」「素晴らしい прекрасный」であった。そして、赤い意味を持つのはスラブ語圏の中でロシア語だけであり、この意味が生まれたのはそう昔のことではない。(Этимологический словарь русского языка, Том II [1982]: 375)

これについては以下の2-2.で詳しく述べる。

次に日本語について確認する。語源辞典によると名詞「赤」は「夜が明けて空が段々白んでくると、しだいに赤味を帯びてくる。それがアカ (明) シで、アカシの語源が独立した語がアカ。」とある。(語源辞典, 名詞編 [2000]: 3) 日本の「赤」は夜明けと暁に通じる明るさに由来するといえる。つまりロシア語は「美しい」の意味が、日本語は「明るい」の意味が語源にあったことがわかる。

2-2. ロシア語の「クラスヌイ」と「赤」を表す意味の発生について

上に述べたように、ロシア語の「クラスヌイ」は本来「美しい」という意味を持っていた。

たとえばロシアの首都モスクワの中心に位置し、世界遺産でもある「赤の広場」の名前も、本来は「美しい広場」の意味であった。この呼び名は17世紀に、つまりロシア革命よりずっと前に名付けられており、ソビエト連邦の社会主義に起因するものではない。

では、赤色を表す意味はいつどうやって獲得されたのであろうか。ワシレーヴィチらの研究をもとに以下にまとめる。

長い間、ロシア語には様々な赤い色相を表すことばとして、「深紅の」を意味する「チェルヴリョーヌイ червлёный」があった。これは古代スラブ語の「チェルヴィ червь（這って歩く虫・ワーム）」を語源とする。大昔は染料の数が極めて少なく、赤い色の場合動物由来の「チェルヴェツ червец（エンジムシまたはカイガラムシ）」から染料を抽出した。² 「チェルヴリョーヌイ червлёный」は次第に広い範囲で赤の色合いを定義するようになり、いつしか「赤い色全般」を表す意味を得るようになり、「白い белый」「黒い чёрный」「青い синий」と並び主要な色彩語の仲間入りをする。しかし17世紀～18世紀、不意に「チェルヴリョーヌイ」はこの役割を「クラスヌイ」に奪われる。しかしその理由がなぜなのかは未だ明らかとされていない。その後、それまで「美しい」を主要な意味としていた「クラスヌイ」は、赤の色彩語としての意味で広く用いられるようになり、18世紀には初めて辞書における第一義が「赤い」となった。（Василевич А. П., Кузнецова С. Н., Мищенко С. С. [2005]: 118）

一方、バヒリナは古い文献から「クラスヌイ」の歴史、変遷について詳細な研究を行っている。それによると、ロシアの古文書で「クラスヌイ」は大昔から非常に多くの、また極めて多様な肯定的意味で用いられた。人についてはその美しく魅力的な容姿を描いたが、そればかりでなく一般的に好ましい性質、つまり「良い хороший」, 「美しい красивый」, 「魅力的な привлекательный」, 「感じがよい приятный」, 「立派な достойный」などを表すためにも用いられた。さらに人だけでなく事物に対しても用いられ、自然現象や社会生活でのできごとに対し「美しい красивый」, 「素晴らしい прекрасный」, 「優秀な превосходный」, 「貴重な ценный」, 「豊かな богатый」, 「申し分ない отличный」, 「見事な отменный」などの意味で用いられた。歴史上の人物に対しては、「美しい красивый」, 「魅力的な привлекательный」だけでなく、「尊敬すべき достойный」, 「高名な знаменитый」, 「輝

2 ピョートル一世の改革まで夏の最初の月（6月）は червень（深紅の月）と呼ばれた。この時期に червец を採集してすり潰し赤色染料とした。ロシア以外のスラブ語圏ではまだこの語は残っており、ウクライナ語では червень、ベラルーシ語では чэрвень、チェコ語では červen である。

かしい славный」などの意味で使われ、聖人伝や宗教儀式の文献においては、キリスト教的倫理の観点から、つまり「価値がある достойный」「尊敬すべき почтенный」の意味や「至福 блаженный」「神聖な святой」の意味でも用いられた。(Бахилина Н. Б. [1975]: 162-165) このように、古代ロシアの初期から 18 世紀にいたるまでありとあらゆる肯定的・好ましい特徴を表すことばとして用いられていたことがわかっている。

3. ロシア語と日本語の「赤」の意味分析

では、次にロシア語と日本語における色彩語「赤(い)」の意味を「赤(い)」「クラスヌイ」を含んだ慣用表現をもとに比較する。

色だけを示すものを「中心となる意味」とし、そこから派生した、あるいは転用した色以外の意味を表すものを「拡張した意味」とする。「拡張した意味」には色を表すと共に別の意味も表す場合、つまり「赤の色相を帯びながらも色以外の何か別の意味を表している場合」と、色を表さない意味、つまり「色彩語を用いながらもまったく色とは関係ない場合」の二つがある。ロシア語では色は形容詞で表されるが、この長語尾形 красный, -ая, -ое, -ые を基本とし、それだけでなく短語尾形 красен, -сна, -сно, -сны や副詞 красно また名詞化したもの красное, красные 動詞 (по)краснеть も含めた。日本語では「赤」・「紅」・「朱」と「赤い」を基本とし、動詞の「赤らめる」や「赤くなる」も含める。現代の日本語とロシア語ではその語の中心となる意味、すなわち「第一義」は共に色を表している。本稿ではまずこの「赤(い)」と「クラスヌイ」を表す概念をおおまかに分類し、どのように対応しているかを確認する。次に対応しない意味・用法についてどのような背景の違いがあるのかを分析する。用法の調査には各種の語源辞典や辞書、辞典を用い、また用例には一部「Национальный корпус русского языка」(ロシア語ナショナルコーパス)と「現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言」を用いる。最後に両国の概念の傾向について分析する。

3-1. 中心となる意味

ロシア語では、辞書によると、血のような色、熟したイチゴ、赤いケシの花の色、ゆでたザリガニの色と記されており、幅広くピンクから茶色までの一連の色相を示すことができる。実際の例を見てみよう。

《ロシア》

- (1) красная роза 赤い薔薇 (2) красные губы 赤い唇 (3) красная пламя 赤い炎
(4) красный кирпич 赤レンガ (5) красная бумажка (革命前の) 10 ルーブル紙幣

例文を見てみると、

(6) Если соус будет недостаточно острым, то можно добавить красный молотый перец.

[Рецепты национальных кухонь: Скандинавская кухня]

(ソースの辛さが十分でない場合は、挽いた赤唐辛子を加えてもよい。)

(7) Несколько многоэтажных домов сняты поздним вечером, небо почти темное, но за домами

— ярко красный закат, а окна в домах горят, словно закат пробивается сквозь них.

[Алексей Кузнецов. *Между Гринвичем и Куреневкой*]

(夜遅くにいくつかの高層ビルが撮影され、空はほとんど暗くなっているが、家の後ろには真っ赤な夕日があり、家の窓はまるで夕日が通り抜けているかのように燃えている。)

以上の例は全て「赤い」と表現されているが、(4)の赤レンガは赤茶色に近く、(5)の紙幣は薄赤い。(6)の赤唐辛子は生の場合は「赤い」が、挽いたものはむしろオレンジに近い色をしており、(7)の夕日も橙色や朱色が強い場合が多いだろう。しかしすべて「クラスヌィ」で表すことができ、「クラスヌィ」は赤を中心の色としてその周辺の色も含みつつ表していることがわかる。

《日本》

辞書によると「人の血や夕焼けのような色であり、輝くような色をいう。朱、だいだい、桃色および赤茶けた色、黄色などにも通じていう。色味としては黄色から茶色まで幅広い色相を示すことができる。」とある。

(8) 赤いレンガ (9) 赤いほおずき (10) 赤瘡 (麻疹の古名)

(11) 赤潮 (プランクトンの異常増殖のため海水が変色する現象)

以上の日本語の例では(8)はロシア語と同様に赤茶色のレンガの色を示している。(9)のほおずきは朱色である。(10)の赤瘡は鮮紅色から赤黒い色までを呈する発疹について表す。(11)の赤潮は、プランクトンの色素によりオレンジ色、赤、赤褐色、茶褐色と様々な色を呈するもので、日本語でも幅広く「赤」の色合いを表していることが確認できる。

3-2. 拡張した意味 <ロシア語と日本語に共通のもの>

次に「赤」と「クラスヌィ」の拡張した意味を見ていこう。これには「赤い色を表すと共に他の意味も含む場合」と「色の意味を全く表さない場合」の二つがある。

それではまずロシア語と日本語で共通に現れた拡張義を見てみよう。

3-2.1 「感情・心の動き」の赤

《ロシア》краснеть от стыда(смущения, страха, и т.д)

(恥ずかしくて、当惑して、恐怖で、等) 赤くなる

- (11) я всегда краснел от стыда за несоответствие вознаграждения за ее труд —120 р.

в год. [Михаил Щукин. «Белый фартук, белый бант...»]

(私は、彼女の仕事に対する報酬が不十分であることに - 年に 120 ルーブル - いつも恥ずかしい
思いをするのでした。)

- (12) А теперь вдруг оказалось, что в глубине сердца эта любовь не забылась, и Катя

смутилась и покраснела: [Людмила Улицкая. «Пиковая дама»]

(そして今、突然、彼女の心の奥底でこの愛が忘れられていなかったことがわかり、カーチャは
狼狽して顔を赤らめた。)

- (13) Выслушав доклад подчиненного, подполковник покраснел от гнева, снял

трубку внутреннего телефона и доложил о происшедшем начальнику РОВД.

[Даниил Корецкий. *Менты не ангелы, но...*]

(部下の報告を聞いた後、大佐は怒りに顔を赤らめ、内線電話の受話器を取り上げ、内務省地区
担当局長に事件を報告した。)

- (14) Стыдливый покраснеет, а бесстыжий победнеет.

(恥ずかしがり屋は赤くなるが恥知らずは青くなる。(羞恥心のある人は嘘を恥じるが、恥知らず
な人は気にしない。))

《日本》赤面する、顔を赤らめる

- (15) 屈辱的だった。怒りで顔が赤くなるような気がした。

(森 瑤子 『あなたに電話』)

- (16) 脳裏に浮かぶのは、大勢の同僚、先輩に囲まれた彼女が自分の名を呼ばれて戸

惑い、顔を赤らめている姿だった。(日高 道夫 『友達』)

- (17) 蒼白になった顔面を、今度は興奮に赤らめながら、ピエール・クルパンが飛び

こんだ。(佐藤 賢一 『二人のガスコン』)

ここでは、ロシア語でも日本語でも同様に「赤くなる」は「顔を赤らめる」「赤面する」
ことで、血がのぼり皮膚が赤くなるという人間の生理的反応を表しつつも、「恥ずかしさ
のため」「喜びや悲しみ、怒り、困惑などで興奮したため」などの場合、「恥ずかしい」「嬉
しい、悲しい、腹立たしい、どぎまぎする」など心の動きそのものや、(11) のように (14)
「恥じる」気持ちを表している。

3-2.2 「警告・危険」の赤

本来、赤色は警戒色で、主に有毒の生物に見られる色彩であり、捕食者など自分に害を及ぼす他の生物に対する警告の役目を担う。これは動物、植物を問わず、更には人間の社会生活にまで広く応用されている。次の例を見てみよう。

《ロシア》 красный свет 信号機の赤、赤信号、赤ランプ

(18) Напомним, Сергей был остановлен полицией за то, что проехал на красный свет светофора. [Павел Абаренов. «Информ пробежка»]

(セルゲイは赤信号で通過したために警察に止められたことを思い出そう。)

(19) Если есть сомнения в его порядочности и репутации, для нас это красный свет.

[Виталий Петлевой. «Институты развития создадут черный список ученых и предпринимателей»]

(彼の品位と評判に疑問がある場合、私たちにとってそれは赤信号です。)

《日本》 赤信号

(20) 食欲不振は健康の赤信号だ。

(21) 景気に赤信号がとる。

これら「赤信号」の例も、ロシア語と日本語では色を表すとともに警告の意味を持つ同じ使い方である。(18)の交通信号機の停止・危険を示す赤色が、(19)(20)(21)では憂慮すべき事態が迫っているという意味で、比喩的に、前途に危険や困難のある警告を示している。

《ロシア》(22) красная книга 赤い本（レッドリスト）

《日本》(23) レッドリスト

国際自然保護連合が作成した絶滅のおそれのある野生生物のリスト。各国の政府管轄機関でも作られておりロシアにも日本にもある。

これは赤い色の本ではなく、絶滅の危険性と危惧の念を赤い色で表現しており、英語の Red List が翻訳されて伝わったものである。日本でも同様に英語をカタカナにして「レッドリスト」と呼ばれている。ロシア語は「赤い本」と訳されている。この赤も「警告」の意味がある。

《ロシア》 красная линия 赤い線 1) 地図で個人と公共エリアを区切る線。2) それ

を超えるとセキュリティが保証されない国際政治上の境界

(24) Россия дает понять турецким и американским партнерам, что существует **красная линия**, за которую переходить нельзя [Алексей Куприянов. «Шанс для Башара»]

(ロシアはトルコとアメリカのパートナーに越えられない**赤い線**があることを明らかにする。)

(24) のような境界を表す線については、固定した語結合は日本では見られないが、地図上で示されるものとして、日本では次のようなものがある。日露のどちらの例も区切りを強調するためのものと考えられる。

《日本》(25) **赤線** (里道) 公図に表示された地番のない道路で通常は土地台帳にも登録されていないもの。は赤く着色され、赤線 (里道) とも呼ばれた。

一方、日本の「赤線」は別の意も持つが、これについては後述する。

《ロシア》(26) **красный флаг** 赤い旗・レッドフラッグ

《日本》(27) **赤旗** (レッドフラッグ)

危険を示す信号としての旗。海での遊泳禁止の旗や自動車競技、あるいはモータースポーツにおいて、コース上でドライバーに対して「レース中止」を伝えるために使用される。

これはスポーツに共通のものとして「ストップ」するよう警告する信号としての役割がある。

3-2.3 「革命」の赤

赤い色は、革命的、革命的活動を指し、社会主義システムを指す。ロシア革命の影響下で、「クラスヌィ」は、色ではない新しい意味が強化され、「革命的」、「共産主義者の」という意味が大きく発展し、形容詞として一連の名称に用いられている。ソビエト連邦の国旗は社会主義・共産主義の意味合いで赤地の国旗を採用した代表である。赤旗は国家団結の誇示の重要な要素となり社会主義国家のシンボルとなった。こうしたことからロシア語にはこの意味での「クラスヌィ」を用いたことが非常に多く作られている。

《ロシア語》ここでは例文ではなく、一連の名称を中心に挙げる。

【①革命運動・ソビエト体制・赤軍にかかわる・左翼的などの意味を表すもの】

(28) **красное знамя** 革命・労働運動などのシンボルとしての赤旗。

大文字で書くと (Красное Знамя) 赤旗勲章、労働赤旗勲章をさす。

(29) **красная звезда** 赤い星 共産主義のシンボルとして用いられる場合、赤い五芒星は五大洲における共産主義の最終的勝利を象徴するとされる。

- (30) красная армия 赤軍 (31) красный командир 赤軍指揮官
(32) красный директор ソビエト時代に主導的地位を占めた産業と経営のエリート
が市場経営に移行した後もその地位にとどまった人たち
(33) красная гвардия 赤衛軍 (34) красный профессор マルクス主義歴史学者
【(複数形で) 革命家、共産主義者など上記①のそれぞれの意味に関して人を表す】
(35) борьба белых с красными 白軍〔反革命派〕と赤軍〔革命派〕との闘い
(36) Город занят красными. 街は赤軍に占領された。

《日本語》

- (37) 赤旗 日本共産党中央委員会の発行する日本語の日刊機関紙。旧称・通称「赤旗」「アカハタ」。
(38) 赤色組合 プロフィンテルンの指導下に成立した革命的な労働組合の称。
(39) 赤色テロ 革命遂行のために無政府主義者などが行う反権力的暴力行為
(40) 上院議員ジョセフ・マッカーシーが、一九五〇年の選挙で再選されたことによって、
「赤狩り」は加速された。(青木 透 『アメリカン・ドリーム その崩壊と再生』)
(41) [...], 盛んに右翼が笠氏を狙い、彼の書いた『日本経済の再編成』という本が赤だ
というので、笠氏をしばらく外国に待避させようという緒方さんらの親心で、 [...]
(細川 隆元 『男でござる一暴れん坊一代記 風の巻』)

日本語においても「革命、社会主義者、共産主義者、左翼」という意味で使用されているが、その使用度や用いられる範囲は当然ながらロシア語の方が広く大きい。日本では共産党や左翼運動が盛んになるにつれ、共産党旗の赤旗にちなんで黨員やシンパを「赤」や「アカ」と呼んだが、この際には「革命」の暴力性や秩序破壊がクローズアップされた。「共産主義の恐怖」の意味である英語の名称 **Red Scare** に対応して日本では、「赤狩り」という1950年代のアメリカの共産主義あるいはその同調者に対する取り締まり運動を指す言葉も生まれた。

3-2.4 「職業、専門性」の赤

《ロシア》 под красную шапку (пойти, попасть..) 赤い帽子のもとに(兵隊に行く、兵隊にとられる)

- (42) Старшие дети скоро уйдут под красную шапку, а гимназист уже в 3-м классе [А. П. Чехов. *Письма Александру Павловичу Чехову*]

(年長の子どもたちはじきに兵隊に行く。中学生の方はもう三年生だ)

昔、兵隊が赤い帽子をかぶっていたことから言われるようになった。

красный фонарь 赤提灯 (娼家のこと。赤い提灯が灯っていたことから)

(43) Все вы, конечно, прогрессисты, ниспровергатели, в церковь не ходите, но ведь и к проституткам тоже. Под **красный фонарь** ни ногой!

[Леонид Юзефович. *Дом свиданий*]

(もちろん皆さんは進歩的で、伝統破壊者であり、教会には行かないし、売春婦のところにも行きません。赤提灯 (娼家) の敷居をまたぎません！)

《日本》赤線

(44) また一方では公娼制度は廃止されたものの、旧遊廓は「赤線」としてしたたかに生き続けていた。(塩川 京子 『描かれた女たち』)

日本では第二次大戦後に GHQ により公娼制度が廃止されてから売春防止法の施行までの間、「遊郭」とされる場所は「特殊飲食店街」とされ公認されていた。警察などの地図ではその地域が赤線で囲われていたことから「赤線区域」、略して「赤線」と呼ばれた。(非合法の「青線」もあり、そこは青線で囲われていた。)そしてロシアでは娼家の入口に赤提灯が下げられていたことから、赤を用いて (43) **красный фонарь** 赤提灯と呼び、「квартал красных фонарей」赤提灯の区画」のようにも使う。一方、日本では「赤提灯」といえば、店先に赤い提灯を掲げ、安い料金を酒を飲ませる店、一杯飲み屋を表している。

(45) 赤帽 駅で乗客の手荷物を運ぶ人。赤い帽子をかぶっているため。ポーター。

(46) 赤前垂れ 赤い色の前垂を着用した料理屋・茶屋などの接客の女のこと。

(47) 赤襟 赤い半襟。 赤い半襟をかけたことから、年若い芸者。

(45) ～ (47) は、色そのものがその人の職業、仕事内容を表す記号として機能している。

又、日本で同じく赤を用いた表現で、「赤紙」は、旧日本軍の招集令状を指し、「赤紙が来た」というだけで出征することを意味した。

3-2.5 「罰則」の赤

《ロシア》**красная карточка** 赤いカード・レッドカード

《日本》レッドカード

(48) **Красная карточка** futbolиста сборной Колумбии Карлоса Санчеса в матче с командой Японии стала первой на чемпионате мира 2018 года в России, сообщает

«Советский спорт». [Раздел «Стиль жизни». «Елизавета II в седьмой раз стала прабабушкой»]

サッカーのコロンビア代表チームのカルロス・サンチェス選手のレッドカードは、日本との試合で、2018年のロシアのワールドカップで最初のものになったと「ソビエトスポーツ」が報じている。

- (49) 黄門の印ろうかざしは、内部腐敗、不正、謀略など悪退治の見せ場であり、退場を求めるレッドカードの演出だ。(京都新聞 2001/3/23 朝刊)

レッドカードはサッカーだけでなく各種スポーツで悪質な反則や乱暴な行為などがなされたときに審判が退場を命ずるときのカードで、元は英語の red card だが、ロシア語では逐語訳して「赤いカード」となっており、日本語では英語をカタカナ読みにしてそのまま使用している。また(49)のように比喩的に退場を命じられるような、極端な不穏当な行動を指して言う場合もある。

赤切符 交通違反の際の告知票。

- (50) この時点から、等しく道路交通法違反とはいっても、行政罰で済まされるものと、赤切符により刑罰を科されるものととの区別が生じたことになる。

(滝井 伊佐武 『人権論入門』)

(50) のように、日本では交通違反や事故を起こしたときにその程度によって赤切符、青切符、白切符の3種類の切符が交付されるが、赤切符は重度の違反の際に交付され、免許取消などといった行政処分に加えて刑事処分が予定されている非常に厳しいものである。切符自体が薄い赤色をしており、色そのものを表してもいるが、赤の持つ禁止のイメージにより事態の重大さも伝わると考えられる。

《ロシア》красная зона 赤いゾーン 矯正労働収容所 (口語で)

- (51) Как же «красная зона», где правит официальная власть, допустила такой бардак? [Николай Варсегов, «Чеченцам Кондопоги за Россию стыдно»]

政府が管理する「赤いゾーン (矯正労働収容所)」は、どのようにしてそのような混乱を許したのでしょうか。

《日本》赤い着物を着せる 入獄する。刑務所で服役する。(明治・大正期に受刑者が赤い着物を着せられたところから使った言葉。)

- (52) 太古には犯罪者には赤い着物を着せるだけで、民は恥じて犯さなかった (『荀子』正論)。(葛 洪 (著) / 本田 濟 (訳) 『抱朴子』)

(51) ロシアと (52) 日本の例はどちらも犯罪者が罰を受ける際のものである。

ロシアの囚人の大多数は有罪となると移送されるコロニーで任期を務めることになるがここでは「赤」と「黒」の領域があり異なる体制を持っている。「赤いゾーン」はより厳しいものと言われる。日本には「赤落ち(あかおち)」という刑務所独特のことばもあり、「赤い着物を着る所に落ちる意味」で入監することをいい、判決が出て懲役が始まることをさしている。ここでは「赤」に避けたいネガティブな意味が込められている。

3-2.6 「祝祭」の赤

《ロシア》

(53) красная суббота 赤い土曜日 (レーニンの誕生日を記念して4月後半の週末に開催された全連合共産主義土曜労働日)

(54) красный день календаря カレンダーの赤い日 (休日、祝日)

この用語の名前は、ソ連の伝統で日めくりカレンダーの休日は赤い色で色付けしたことに由来する。現代の「表形式」のカレンダーでは、休日は赤で強調される。日本でもカレンダーの日曜・祝日は赤い字で書かれることが多いが、赤日、赤マークと通称として呼ぶことはあっても定義は見つからなかった。

《日本》

(55) 赤飯 もち米を小豆とともに蒸したこわ飯。おこわ。あかのごはん。お祝いの時に用いる。

(56) 赤柏 陰暦1月1日、赤飯を柏の葉に盛って祝ったことから赤飯のこと

日本では古くから赤い色には邪気を祓う力があると考えられており、加えてお米が高級な食べ物であったことから神様に赤米を炊いて供える風習があった。祝儀用となったのは室町時代、江戸時代後期になって一般庶民の祝いの日の食卓にまで広まった。赤に本来あった「魔除け」の意味が「祝い」に転じている。

(57) 紅白まんじゅう 赤と白をひとつずつセットにしたおまんじゅうのこと。

日本では古くから、日常(ケ:褻)と非日常(ハレ:晴:表立って晴れやかなこと)を区別し、紅白という赤色と白色との組み合わせによりハレ(非日常)を象徴していることが多い。そのため伝統的に紅白は縁起物として祝いの儀式で用いられハレの日の「めでたさ」を象徴している。紅白まんじゅうのほか、紅白幕、紅白の水引、紅白餅(紅白菱餅)、紅白かまぼこ、紅白なますなど一連のことばがある。

一方ロシアでは、「白と赤」の組み合わせは流れる血と死に至る蒼白さの象徴ともなる。赤が生命をつかさどる「血」の色であり、生命を象徴すると同時に死の恐怖を意味しても

いる。

赤いちゃんちゃんこ

(58) 還暦のお祝いの赤いちゃんちゃんこと赤い帽子も着せました。

(米沢 富美子 『二人で紡いだ物語』)

還暦とは、満 60 歳のことを指し、十干と十二支を組み合わせた干支が一巡し、生まれた年の干支に戻ることであるが、この長寿の祝いの習慣は中国から奈良時代に伝わり貴族たちの間で広く行われるようになったのが始まりである。中国では赤はめでたい、祝福、吉祥を表す色である。

3- 2. 7 「火、火事」の赤

《ロシア》красный петух 赤い雄鶏（火事を意味する）

(59) Здесь «красный петух» умыкнул около 4 тысяч гектаров леса.

ここで「赤いオンドリ（火事）」が約 4000 ヘクタールの森を奪った。

(60) пустить красного петуха 雄鶏を放す（放火する）

《日本》赤馬 火事または放火 火事の際は赤馬が走るように火が速く飛ぶことからいう

(61) 「赤馬の夢をみると火事にあう」

火事、及び放火はロシア語では雄鶏にたとえられている。古代スラブの人々は雄鶏を敬い太陽そのものと関連付け、火のシンボルとみなしていた。赤い雄鶏は民俗文化では火事と結びついていて、農場で雄鶏が死ぬと火事が起こると信じられていた。もし激しく鳴き、窓をコツコツ叩くときは火事の知らせだった。日本では火事の発生を予兆する動物についての言い伝えは牛やいたちなど様々あるが、そのひとつとして「赤馬の夢をみると火事にあう」があり、戒めを伴った火事の予兆についてのことわざや言い伝えとして全国に分布している。

次にロシア語にのみ現れている用例を見ていこう。

3- 3. 拡張した意味 <ロシア語にのみ見られるもの>

3- 3. 1 「美しい～あらゆる善いもの」の赤

「クラスヌイ」の古来の意味であり、非常に多くの肯定的概念が見られる。多岐にわたるため 6 つに分類したが、意味的には重なる場合もある（大切であり、儀礼的でもある、といったように）。ダリの辞書では「善きもの、美しいものについてのことは：美しい、素晴らしい、この上なく良い、最高の」と説明している。（Толковый словарь живого

великоруссуого языка [1988] : 375)

分類 1. 美しさ, 若さ (красивый, прекрасный, молодость)

(62) красная невеста 美しい花嫁

(63) красная (красна) девица (девка) (若い娘の固定修飾語として) うるわしの乙女

※ красная девица 恥ずかしがり屋の若い男性をからかっていう表現もある。

(64) красный молодец (若く美しい) 若者

(65) красная площадь 美しい広場 (モスクワの赤の広場)

(66) Не место красит человека, а человек место. 場所が人を飾るのではなく、人が場所を飾る (大切なのは人間としての品位、価値であり、その地位ではない。有能な人はどんな場所でも力を発揮する。)

(67) Красна ягодка, да вкус горька. 実は美しいが味は苦い。(外見は美しいが中身は価値がない)

(68) Красному яблоку червоточинка не укор. きれいなりんごは虫食いもとがめなし (美しい人はたとえ小さな虫食い穴のような傷があっても質は損なわれない)

分類 2. 喜ばしい, うれしい, しあわせな (радостный, приятный, счастливый)

(69) красное детство しあわせな幼年時代

(70) красные дни しあわせな日々

(71) красная горка 復活祭明けの第一週 (昔からの結婚週間) 春の初めの祭り, 若者の祭り

(72) Не красна изба углями, а красна пирогами. 家は美しい隅によってではなくピロークゆえに心楽しい。(家は見た目ではなく心のこもった歓待である。)

(73) Весна красна цветами, а осень-плодами. 春が花により素晴らしく, 秋は実りにより素晴らしい。(万事時期が大切。自然には悪い天気はない。)

(74) Красна птица пером, а человек умом. 鳥は羽により美しく, 人は頭により素晴らしい。(動物は外見で判断するが, 人は中身が重要)

(75) На миру (на людях) и смерть красна. 皆と一緒になら死もまたいとわず。(人は一人でなければどんなものにも耐えられる, 死ぬことさえ怖くない)

(76) Старость не красные дни. 老いは楽しい日々ではない (年はとりたくないもの)

(77) Красную речь красно и слушать. 気の利いた話は聞いていても気持ちよい (*自分の期待していたことばを聞いたときに言う)

分類 3. 立派な, 価値のある (почётный, ценный, дорогой)

(78) красная доска 表彰板 成績優秀者の氏名や写真を掲げるためのもの。

(79) красный уголок 談話室 (公共施設にある文化啓蒙, 社会政治活動のための部屋)

(80) Долг платежом красен. 借りは返すもの。(善には善、悪には悪をもって応えるのが世のならい。)

(81) Красному гостю красное место. 大事なお客様には立派な席を。

(82) Первому гостю первое место и красная ложка. 最初のお客様には一番の席と大切なスプーンを

分類4. 晴れた、明るい、輝く (ясный, светлый, яркий)

(83) красное солнышко (輝く) お日様

(84) красная весна 輝く春

(85) красный день 晴れた日、好日

分類5. 大切な、大事な (дорогой, самый важный)

(86) красный двор 前庭

(87) красный поезд (昔のにぎやかな) 婚礼の行列

(88) красный стол 婚礼の晩または翌日に新郎の両親のもとで行われるふるまいの宴

(89) красный угол 美しい隅。(昔の農家での)(正面の角、ベチカと反対側、南東の向きに食卓が置かれ、イコンがかけられていた。一番の上座)

(90) красное окно 農家の中央の大窓

(91) красные дети. 一男一女

(92) сын да дочь- красные детки. 一男一女は素晴らしい子どもたち

分類6. 儀礼用の、正面の、正式の (парадный, почётный)

(93) красное крыльцо (ロシア式家屋の) 表玄関 (入口の階段)

(94) красные ворота 正門

ロシア語の「クラスヌイ」は幅広くあらゆる善きものに用いられていた。こうした用法はロシア固有の特質であるといえる。

ロシア語では本来語源的に第一義であったことから、古くからのことわざや成句の数が突出しており、「クラスヌイ」の概念の中で重要な位置を占めていることがわかる。「クラスヌイ」は大昔から、非常に多くの、また極めて多様な肯定的意味で用いられてきたが、現代にもそれらのことわざや言い回しは伝わっており、日常の中で使われ、「赤い」の意味ではない正しい意味が理解されている。例えば (63) «красная девица» は民話のヒロインである若く美しい娘のことで、ロシアでは子どもの頃から目にし、耳にしているだろう。(86) «красный двор» (前庭), (93) «красное крыльцо» (ロシア式家屋の表玄関), (94) «красные ворота» (正門) にあるような「正式な」「正面の」といった意味は全く日本語

からは予想できない意味である。(72) «Не красно изба углами, а красна пирогам» (家はその美しい隅によってではなくピログゆえに心楽しい。＜家の良さは見た目ではなく心のこもった歓待である＞) や, (81) «красному гостю-красное место» (立派な客には立派な席を) は, お客様を手厚くおもてなしすることを重要視する民族性を教えてくれ, これは現代にも受け継がれている。また当時のロシアの農民の生活も伝えてくれる。(89) «красный угол» とは, 「美しい隅」のことを言い, 農民の家屋で最も美しく整えられイコンが掛けられ, 大切にされていた場所である。ここには食卓がおかれ一番の上座であった。ここでは「クラスヌイ」は「立派な」, 「素晴らしい」という意味を表している。また (74) «красна птица пером, а человек умом.» (鳥は羽により美しく, 人は頭により素晴らしい。＜動物は外見で判断するが, 人は中身が重要。＞) では, 人間は見かけ (外見) よりも中身 (内容・実質) が大切である, また見かけだけでは判断してはならないという戒めを表している。(66) Не место красит человека, а человек место. 場所が人を飾るのではなく, 人が場所を飾る。(大切なのは人間としての品位, 価値であり, その地位ではない。) も同様である。レベデワが言うように「赤は, 人に, 物に, またイメージに内在する調和としての美しさの象徴であるだけではない。民衆の意識の中では, 美しさは真実と善に結びついていた。」。(Лебедева [2011] : 142)

一方, 日本でも, 次のような肯定的な表現に赤色が用いられている。

(95) 朝に紅顔あって夕べに白骨となる (和漢朗詠集)

(人の生死はいつどうなるかわからないという意味。)

「紅顔」は若々しい血色の良さを表すため, ここでは「若さ」を示している。

(96) 紅は園生に植えても隠れなし

(優れた人物はどのようなところでも輝いている。)

紅花は他の草に交じっても美しさが目立つことから, ここでの「紅」は「優れた・有能な人物」の意味を表している。

(97) 紫の朱を奪う (むらさきのあけをうばう)

(まがいものが本物にとって代わる)

古代中国では青赤黄白黒の五色をまじりけのない正色と定めていたが, やがて紫などの中間色が好まれるようになったことをたとえに孔子が社会秩序の乱れを嘆いたことは。「正當なもの」「本物」を意味している。

日本でもこれらのように赤色が肯定的な表現に使われている例が確認できたが, ロシアの用例では色の意味を全く表さず, 用例が非常に多いことより, 本稿の分類ではロシアに

特有の表現と整理した。

3-3.2 「貴重な動植物」の赤

(98) **красный лес** エゾマツ, トウヒ, ハリモミなどの針葉樹林

красный зверь 狩猟家の最も珍重する獣 (クマ, オオカミ, キツネ, テンなど)

(99) Выскочил **красный зверь** на белую поляну — лисица, злая, с улыбкой, хотя у этой злой улыбающейся собачки такой огромный хвост, как будто ей его и девать некуда.

[М. М. Пришвин. *Дневники*]

貴重な獣が白い牧草地に飛び出した - どう猛で, 笑顔を浮かべたキツネだ - この邪悪な笑顔の犬は, まるでそれを置く場所がないかのような, とても大きな尾を持っている。

(100) **красное дерево** マホガニー

(101) **красная дичь** 湿原の第一級の野鳥

(102) **красная рыба** 元はチョウザメ類の魚の総称

非常に貴重な動物の種や植物の品種などを表す。この意味も, 前掲した「美しい」の意味からの流れと考えられる。ロシアにしか見られない例である。

3-3.3 「強調」の赤

(103) Оптимизм **проходит красной нитью** через его роман.

楽観主義が彼の長編を一貫している (赤い糸が通っている)。

красной нитью проходить は一貫して強調している, あるいは基調を成している, という意味がある。赤い糸はここでは主要な考えを表す。

3-3.4 「改行」の赤

(104) **красная строка** 文章の書きだしまは各節 (第一行を一字下げて書くこと)

Ну и обязательно в конце добавить (**с красной строки**), что такой-то делу партии Ленина-Сталина предан.[Василь Быков. *Болото*]

さて, 最後に (**改行して**) レーニン - スターリンの党が打ち込んだそのような事業を必ず追加してください。

3-3.5 「機知」の赤

(105) Ради **красного словца** не пожалеет родного отца.

しゃれを言うためなら実の父親でも惜しまない (何でもやる)

красное слово (赤い文字) は、機知に富んだ名言、警句を表している。

3- 3. 6 「布」の赤

(106) Но, Николай Иванович, я же по торговым делам путешествую, узнаю, где лучше сбывать **красный товар**. [В. А. Обручев. *В дёбрях Центральной Азии*]

しかしニコライ・イワノヴィチ、私は商売で旅をしています。**反物**を売りさばくのに良い場所を見つけますよ。

(107) Чтобы этого не случилось, Пищимуха идет в **красный ряд** и покупает ей ситцу на платье. [С. Н. Сергеев-Ценский. «Воинский начальник»]

これをふせぐためにピシムハは**反物市**に行き、彼女にワンピース用の更紗を買います。

красный товар は商品としての布地のことを言った。**красный ряд** はそれらを売る市のことである。これは布地が色とりどりで美しいということから来たと思われる。

3- 3. 7 「高い値段」の赤

(108) **красная цена** つけることができる一番高い値段

ロシア語では「赤い値段」は最高の値段を意味するが、一方日本語では「赤い値段 (値札)」バーゲン品、つまり安い値段を意味する。

3- 3. 8 「教会」の赤

(109) **красный звон** 復活大斎の鐘声

3- 4. 拡張した意味 <日本語にのみ見られるもの>

次に日本のみにあるものを見てみよう。

3- 4. 1 「全くの」の赤

日本語で「赤」は「全くの」「ありのままに」という概念を強調する意味を持つが、これはロシア語には見られない用法といえる。

(110) **まっ赤なうそ**。**赤嘘** 全くのうそのことをいう。

(111) **赤の他人** まったくの他人。全然縁のない人。

(112) **赤恥** 人の前で受けるひどい恥

(113) **赤裸** (せきら／あかはだか)・**赤条条** (せきじょうじょう)

体に何もつけていないこと。まるはだか。つつみかくしのないこと、ありのまま

財産などがなにもないこと。「火事で焼け出され赤裸になる」

(114) 赤裸々

包み隠しのないこと。からだになにもつけていないこと、まるはだか。あからさま
「赤裸々の告白」「赤裸々に言う」

(115) 赤肌・赤地（せきち） 山に草木がなく地肌がすっかり出ていること

(116) 赤手 手に何ももたないこと からて すで

(117) 赤貧 何一つ所有物がなほどの、ひどい貧乏。

(118) 赤誠・赤心 少しもうそや偽りのない心。真心

「真っ赤なうそ」「赤嘘」「赤の他人」「赤恥」「赤貧」などにおける「赤」は、「強調」する意味を加える働きをしており、それぞれ「明らかなうそ」、「全くの他人」「ものすごく恥ずかしいこと」「非常に貧しいこと」を表している。「赤裸（せきら／あかはだか。）」「赤手」「赤条条（せきじょうじょう）」「赤裸々（せきらら）」などは全く何一つ身に付けていないこと、持たないこと、あるいは全く何も隠していないことを示す。「赤肌」「赤地（せきち）」などもまったく何も身に付けていない身体を土地になぞらえて、草も木も生えていないということを表現している。これは赤の語源が「あかるい」の意味を持っていたことから、光がさして充分に見えることを意味し、転じて明白であること、疑う余地のないこと、何も隠していないことを表している。

3- 4. 2 「運命」の赤

(119) 赤い糸で結ばれる

結婚する運命にあるということ。結婚する男女は赤い糸で手の小指がつながっているという俗信から。生まれる前から結ばれることが運命となっているというたとえ。

中国唐の故事では、夫婦の縁を結ぶという赤い縄「赤縄（せきじょう）」ということばがある。日本では「足首の赤い縄」から、「手の小指の赤い糸」へと変わっている。

3- 4. 3 「安い値段」の赤

(120) 赤札 特価品であることを示すための札

目立つように赤い紙を使うことからいう。

(121) 赤切符 鉄道が三等級制であったときの一番運賃の安い切符のこと。客車の帯の色からこう呼ばれた。

3- 4. 4 「熟す」の赤（果物や野菜）

(122) トマトが赤くなる，柿が赤くなる

野菜や果物は熟すと赤くなり，成熟したことを示す。

3- 4. 5 「校正」の赤

(123) 赤を入れる，または朱を入れる。赤入れ。

文章を添削・訂正することを意味する語。添削が赤ペンで行われることが多いことに由来する。

3- 4. 6 「女性」の赤

(124) 紅一点

中国の詩が由来。見渡す限り緑のくさむらの中に，ただ一輪，紅色の花が艶やかに咲いているという意味から，多くの男性の中に一人だけ女性が入っていることのたとえ。本来は多くのものの中に，ただ一つだけすぐれて目立つことをいい，必ずしも女性だけを指したものではないが現代ではほぼ「男性ばかりの中の女性がただ一人」という意味で用いられている。

3- 4. 7 「命」の赤

(125) 赤い信女 未亡人。後家

（「信女」は女性の戒名につける称号）未亡人の異称。古く，夫に死なれた妻は他家へ嫁がないとして，戒名を受け，夫婦連名で石塔などに戒名を彫りつけ，妻のほうは朱を塗りこめておいた風習による語。赤い名。ここでは「赤」は生きているということを表している。つまり，朱色の戒名はまだ仏門に入っていないということを示し，亡くなったら色を抜く。

3- 4. 8 「純真」の赤

(126) 大人は赤子の心を失わず

大徳の人と言われるほどの人物はいつまでも赤子のような純真な心を失わずに持っているものだというたとえ。

(127) 赤子の手をひねるよう

抵抗する力のない者を相手にする。極めて容易なことのたとえ。

「赤子」（あかご，またはせきし）は，生まれて間もない子を示す。「赤」の語源である「明ける」から来ており，朝に昇る太陽からくる「純粹で穢れがない」「はじまり」という

イメージと結びついたと言われている。一方で生まれたばかりのとき皮膚が赤く見えるからとも言われている。

日本では、赤に次のような否定的な意味もある。

3-4.9 「損失」の赤

- (128) 赤字、赤 収入よりも支出が超過すること（簿記で欠損を赤インクで記すところより）「決算は赤だ」のように赤字を省略して「赤」という場合もある。

3-4.10 「低俗」の赤

- (129) 赤新聞 暴露記事などを主とする低俗な新聞
(130) 赤本 赤い表紙をした本について様々なものの俗称となったが、そのひとつに俗受けをねらった低俗な単行本や雑誌の類。いかがわしい内容の本がある。

3-4.11 「落第」の赤

- (131) 赤点 落第点。赤色で記すところからいう。

3-4.12 「不浄」の赤

- (132) 赤不浄

出産、月経の穢れ。狩猟・漁労生活者や酒造り、鍛冶屋などはこれを忌んで一定期間仕事を休む場合が多い。黒不浄は死の穢れのこと

3-4.13 「凶・悪」を表す

- (133) 赤口（しゃっこう）

六曜の一。赤口神のつかさどる日で、公事、訴訟、契約などを忌む。凶日とされた。赤口神は舌の赤い神といわれ、弁舌を用いるに悪き日と言われた。六曜は古く中国から伝わったものだが現代日本でもまだ冠婚葬祭時の暦として尊重される場合がある。

- (134) 「朱に交われれば赤くなる」

人は付き合う仲間によってよくも悪くもなるというたとえ。

朱は赤の染料。ちょっと触るだけでも染まってしまうことから接する者の影響力の強さにたとえられている。現代では悪い感化力にいう場合がほとんどであるが、江戸時代は良い

場合にも用いられた。

(135) 赤っ顔 (あかつら)

浄瑠璃・歌舞伎で顔を赤く塗るメイクアップ。又その扮装の役。はじめ勇猛と奸悪の両性格に用いられたが、のちには敵役のみとなった。いかつさや怖さが強調される。

4. 「赤 (い)」と「クラスヌィ」の概念的相違の分析

上で見てきたように、「赤」と「クラスヌィ」はその意味拡張においてもかなりの重なりが確認される。これは「赤」・「クラスヌィ」という語に対する人類共通の認識とイメージがあることを示しているだろう。しかし、同時にそれぞれの語には特徴的な概念が存在している。

ロシア語では、色相だけを表す意味と、拡張した意味15個を取り上げた。15個の拡張した意味の中には遠い昔のスラブの時代から使われたものがそのまま残っているものがあった。そもそもの語源の意味である「美しい」に代表される肯定的な概念は最も用例が多かった。「美しい・若い」「喜ばしい・幸せな」「立派な・価値のある」「晴れた・輝く」「大事な」「正式な・正面の」の6つに分類して確認した。これらはことわざなどの固定した慣用表現となって正しい理解が現代にも伝わり残っている。このスラブ時代に使われた「美しい」の意味が「クラスヌィ」の人生の一つ目の時代だとすれば、二つ目の時代は、第一義が「赤い色」に変わった17－18世紀であろう。赤い色が特に積極的に用いられたのは、赤が社会秩序の象徴となったソビエト時代である。この時代にはкрасн-を語幹に持った「赤軍 красная армия」,「赤色海軍 красный флот」などたくさんの新しいことばが生まれ、これには「名誉の」「儀式的な」といったニュアンスも含まれた。「赤い旗」の時代が過ぎた現在では、これらのことばは口にされることが少なくなった。時代の変遷の中では赤は新しい意味も獲得していく。外来文化の借用も確認でき、ロシア語でも警告・禁止の意味を持つ「レッドブック красная книга」や「レッドカード красная карточка」などが生まれている。また派生した意味では「うるわしの乙女」を恥ずかしがり屋の若い男性に対してからかって言う使い方も生まれた。

日本語については、色相だけを表す意味と、拡張した意味13個を取り上げた。特徴的なのは、ロシア語に比べ否定的の意味が多く確認できたことだ。「低俗」(赤本, 赤新聞)や「基準の達しない, 不足」(赤字, 赤点), また六曜より凶の意味もあった。民俗学において血を不浄のものとして出産, 月経を穢れとして忌むことより「不浄」の例があった。一

方、日本ではおめでたい意味が赤にはある。基本的には白との組み合わせによりお祝いの儀式、縁起物の象徴となっている。もう一点、赤の語源である「アカ（明）シ」が元になり、「ありのままの」「全くの」という意味で「強調」の働きが確認された。これには多くの用例があり（赤の他人、まっかな嘘、赤恥、赤貧）否定的に使われる例も多く確認された。

ここで、両国の拡張した意味の慣用表現について、その意味傾向が、肯定的であるか、否定的であるかを比較してみよう。ソローキンは「慣用表現の理解には、知覚者が注目する意味的支点の要素、その支点要素と非支点要素の間の固定したつながり、およびこれらの要素がどのような評価を生み出すかに関わっている」と述べた。（Сорокин [2006]: 80）「赤」を構成要素に持つ固定した慣用表現の持つ意味傾向が肯定的か否定的かというひとつの評価を比較することにより、それぞれの文化圏でのとらえ方の違いがより明らかになると考える。一般的に赤という色には肯定的イメージ（火、太陽、生命、エネルギー、情熱、活動）も否定的イメージ（攻撃、支配、怒り暴力）もあるとされている。しかし、拡張した概念をもつ白露の慣用表現においては、赤は支点となったり非支点となったりしながら存在し、全体として、双方の異なる文化を背景に固有の評価が生み出されていることが考えられる。

ある概念が発生したかしないかを○と×で示し、その下に肯定的・否定的の意味傾向を記した。尚、同じ概念でも肯定的な面と否定的な面を持っている場合があり、その場合は「どちらでもない」に含めた。図1、図2は取り上げた用例を同じやり方で分類し、ロシア、日本それぞれに数の割合で比較をした。

表 1. 拡張した意味傾向の比較

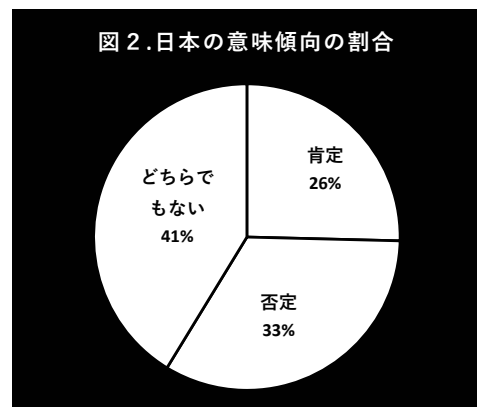
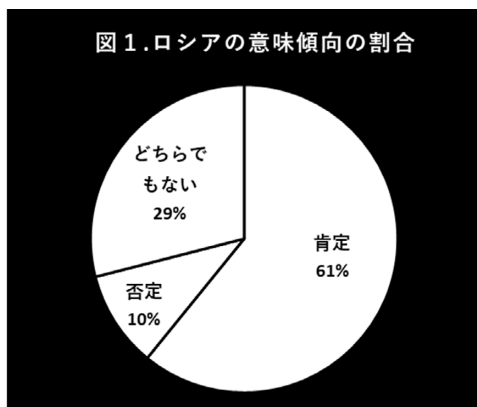
	感情	警告・危険	革命	職業	罰則	祝祭	火・火災	美・若さ
日本	○	○	○	○	○	○	○	○
ロシア	○	○	○	○	○	○	○	○
肯定・否定	どちらでもない	否定	どちらでもない	どちらでもない	否定	肯定	否定	肯定

	嬉しい・幸せ	価値ある	晴れた	大切な	儀礼用の	貴重な動植物	強調	機知
日本	×	○	×	×	×	×	×	×
ロシア	○	○	○	○	○	○	○	○
肯定・否定	肯定	肯定	肯定	肯定	肯定	肯定	どちらでもない	肯定

	改行	布	高値	教会	全くの	運命	安値	熟す
日本	×	×	×	×	○	○	○	○
ロシア	○	○	○	○	×	×	×	×
肯定・否定	どちらでもない	どちらでもない	どちらでもない	肯定	どちらでもない	肯定	どちらでもない	肯定

	校正	命	純真	損失	低俗	落第	校正	不浄	凶・悪
日本	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ロシア	×	×	×	×	×	×	×	×	×
肯定・否定	どちらでもない	どちらでもない	肯定	否定	否定	否定	どちらでもない	否定	否定

※「どちらでもない」には肯定と否定の両方の意味を持つものを含める

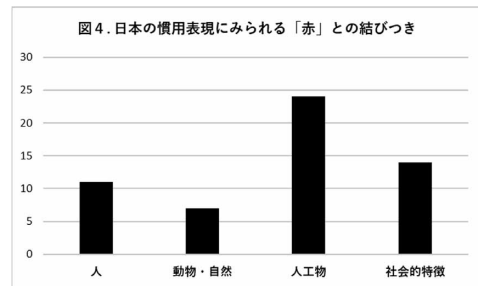
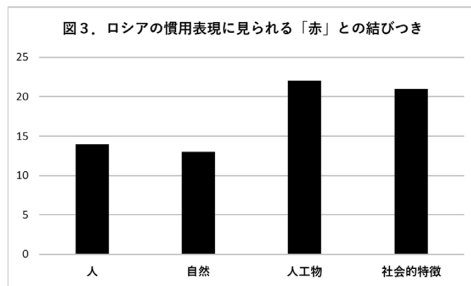


上記のように、どちらの言語表現においても肯定的意味と否定的意味が確認された。ロシア語においては肯定的意味が半数以上を占めており、これは主に本来の語源であった「美しい」を代表とする意味が広く言葉の上に残っていることが影響しているだろう。又否定的意味が非常に少ないことも特徴である。一方、日本語では逆に否定的な意味で使われている例が多かった。意味としては「危険」や、基準に達しない意味での「損失」「落第」、また道徳的な観点より「低俗」、縁起に関わる「凶」「不浄」などが挙げられる。

次に、今度は両国の拡張した意味を持つ慣用表現について、「赤」は、周りにある現実世界のどのようなことばと結びついて意味を与えていたのかを比較してみよう。取り上げた用例について現れたことばを「人」「自然」「人工物」「社会的特徴」の4つに分類し、表2、及び図3、図4に表した。

表2. ロシア人と日本人の「赤」と結びついたことば

ロシア	人	14	恥ずかしい、狼狽、怒り、緊張、指揮官、経営者、学者、軍人 花嫁、乙女、若者、人、こども（2）
	自然	13	雄鶏、木の実、りんご、丘、春、太陽、春、木、森、動物、魚、鳥 きのこ
	人工物	22	信号、本、地図、電灯、旗、バッジ、カード、カレンダー、家、看板 部屋（2）、スプーン、前庭、階段、窓、玄関、門、糸、布、鐘、広場
	社会的特徴	21	軍、軍隊、兵隊、収容所、曜日、時代、日々（2）、ことば（3）、祭り、死、 若さ、ふるまい、客、席、婚礼行列、宴、文章、値段
日本	人	11	恥ずかしい、当惑、興奮、共産主義者、裸（2）、肌、女性、妻、赤子、手、顔
	自然	6	葉、馬、山、トマト、柿
	人工物	24	信号、本（2）、地図、旗、帽子、前垂、半襟、令状、カード、切符（2）、 着物、米、まんじゅう、幕、水引、餅、なます、ちゃんちゃんこ 糸、札、新聞、ペン
	社会的特徴	14	組合、テロ、取り締まり、嘘、他人、恥、貧しさ、心、誠実さ、落第、文字 不浄、暦、仲間



両国とも、「赤」がさまざまな領域の単語と結びついており周りの世界全体に広がっていることがわかる。しかしロシアと日本では領域別のことばの出現に一致や類似が見られず、それぞれ独自のやり方で「赤」「クラスニィ」を用いて現実を再現しているということができらるだろう。具体的な特徴としては、「社会的特徴」の領域で日露のグラフの差がみられたが、ロシアでは社会的なできごとや人付き合い、社会的機関を表す単語が入り、善いものを表す意味とソビエト体制を表すものが確認できた。日本では「安い」「罪」「基準に達しない」など否定的な意味を形作るものが多かった。また「自然」の領域では、ロ

シアでは太陽や森など自然のものを称えるために「クラスニイ」を用いるため例が多かった。「人工物」においては日露とも一番用例が多かったが、日本では特に歴史的な「おめでたい」ことに関する物が多く確認できた。

5. おわりに

日本語の「赤（い）」とロシア語の「クラスヌイ」を構成要素に持つ慣用表現を比較対照した。日本語とロシア語の各種辞書と辞典により意味を確認し、例文については辞書及び「Национальный корпус русского языка」³（ロシア語ナショナルコーパス）と「現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言」⁴を利用して選択した。赤い色がそれぞれの言語共同体において持つ概念、およびそれらと現実世界との結びつきについて以下のように共通性と固有性の一端を明らかにした。

共通性については、色を表すという意味では日本語とロシア語の違いはあまりなく、周辺の色相の拡がりも同様であった。重なる意味も多く、人間の生理的反応で顔が赤くすることや警告色への反応は、人間あるいは生き物全体にとって共通のものであるといえる。さらに外来文化の影響により色彩語の意味は双方ともに拡がったといえる。スポーツや交流、また文学作品がもとになり、ことばと共にその意味も伝わっていることが確認できた。

固有性については、色を表さない拡張した意味において日本語とロシア語の大きな違いが確認された。その意味傾向を比較すると、ロシア語において肯定的意味をもつ表現が突出していた。これはロシア語の「赤」の語源「美 краса」につながる「美しい、素晴らしい、立派な」などの様々な慣用表現が特に多く存在し、ことわざや格言も多かったことが要因である。一方、日本語では「赤」が否定的な意味で使われている例が多く確認された。意味としては「危険」や、基準に達しない意味で「損失」「落第」、また道徳的な観点より「低俗」、縁起に関わる「凶」「不浄」などがあった。「赤恥」などのように強調の意味で用いられる例も特徴的であった。

さらに色彩語「赤」が慣用表現となってこれらの概念を表すときには、色彩語だけで存在することはないため結びつくことばが必要であるが、これらのことばこそが現実世界を反映していると考え、「人」「自然」「人工物」「社会的特徴」の4つの観点で分類した。ロシア語、日本語ともに周りをとりまくあらゆる現実世界と結びついていることがわかり、

3 採用例文 (6), (7), (11), (12), (13), (14), (18), (19), (24), (42), (43), (48), (51), (99), (104), (106), (107)

4 採用例文 (15), (16), (17), (40), (41), (44), (49), (50), (52), (58)

その方向性や焦点の置き方の点で両者の間には相違が確認された。

以上のことより、日本語とロシア語の「赤」という要素を含む慣用表現は、人類に共通の価値観を内包しつつ、同時に、その言語文化共同体に共通の世界の見方、言語的世界像を反映しているといえる。このことは所属する言語文化圏の世界の習慣や伝統と密接に関連しており、人々の価値や尺度を理解するための鍵となるであろう。

参考文献

- Бахилина Н.Б. [1975] *История цветообозначений в русском языке*, М., Наука.
- Баско Н. В., Мoriguti К., [2018] «Сравнительный анализ русских и японских соматических фразеологизмов в целях преподавания русского языка иностранцам», *Современный Русский язык: Функциональные проблемы преподавания. Мат. XXIII Междунар. науч.-практ. конф. Сер. Вестник Российского культурного центра*, Вып. 32, С. 197-203.
<http://www.ruscenter.hu/uploads/content/hash80/84.pdf> (確認 2020.11.29)
- Вардзелашвили Ж. А., [2009] «Символизация обыденного в языковой картине мира», *Acta Linguistica Vol. 3, 2*, С. 64-70.
<https://www.actalinguistica.com/arhiv/index.php/als/article/view/205/294> (確認 2020.11.29)
- Василевич А.П., Кузнецова С. Н., Мищенко С. С. [2005] *Цвет и названия цвета в русском языке*, М., КомКнига.
- Василевич А. П., [2007] «Этимология цветоименований как зеркало национально-культурного сознания», *Наименования цвета в индоевропейских языках : Системный и исторический анализ*, М., КомКнига, С. 9-28.
<http://philology.ru/linguistics1/vasilevich-07.htm> (確認 2020.11.29)
- Горбачевич К. С., [2007] *Большой академический словарь русского языка*, М., СПб., «Наука».
- Даль В. И., [1994] *Толковый словарь живого великорусского языка*, М., «Прогресс» «Универс».
- Жуков В. П., Жуков А. В., [1994] *Школьный фразеологический словарь русского языка*, М., «Просвещение».
- Завьялова Н. А., [2011] «Фразеологические единицы с колоративным компонентом как составляющая дискурса повседневности Японии, Великобритании и России», Екатеринбург, Изд-во Урал. Ун-та.
- Кудрина А. В., Мещеряков Б. Г. [2011] «Семантика цвета в разных культурах», *Психологический журнал Международного университета природы, общества и человека «Дубна»*. № 1. С. 1-18
<http://www.doc.knigi-x.ru/22psihologiya/117479-1-semantika-cveta-raznih-kulturah-psihologicheskij-zhurnal-mezhdunarodnogo-universiteta-prirodi-obschestv.php> (確認 2020.11.29)
- Кулинская С. В. [2015] «Фразеологические единицы и пословицы с компонентом «красный цвет» и их отражение в языковой картине мира (на примере русского, английского и французского языков)», *Вестник Краснодарского университета МВД России*, С. 129-132
<https://cyberleninka.ru/article/n/frazeologicheskie-edinitsy-i-poslovitsy-s-komponentom-krasnyy-tsvet-i-ih-otrazhenie-v-yazykovoy-kartine-mira-na-primere-russkogo> (確認 2020.11.29)
- Кульпина В. Г. [2006] «Изучение социоментальной детерминированности терминов цвета в современном русском языке (обзор)» *Русский язык в современном обществе : Функциональные и статусные характеристики* / РАН. ИНИОН С. 197-231
<https://istina.msu.ru/media/publications/articles/6e9/060/1418011/CvetoTermINION.pdf> (確認 2020.11.29)
- Лебедева Г. Н. [2011] «Символика цвета в русской традиционной культуре», *Царскосельские чтения 3(XV)*, С.

142-146.

<https://cyberleninka.ru/article/n/simvolika-tsveta-v-russkoy-traditsionnoy-kulture> (2020.11.29 確認)

Молотокова А. И., [1986] *Фразеологический словарь русского языка.*, М., «Русский язык»

Ожегов С. И., Шведова Н. Ю. [1992] *Толковый словарь русского языка*, М., «Азъ» Ltd.

Праченко О. В. [2003] «Семантика фразеологизмов и пословиц с компонентом «цвет» (на материале русского и английского языков)», *Русская и сопоставительная филология*, Изд-во Казан. гос. ун-та. С. 57-60.

<http://old.kpfu.ru/fil/kn2/index.php?sod=12> (2020.11.29 確認)

Романович Г. А., [2016] «История развития цветообозначений в русском и французском языках», *Филологические науки. Вопросы теории и практики*, С. 137-139.

<https://cyberleninka.ru/article/n/istoriya-razvitiya-tsvetooboznacheniy-v-russkom-i-frantsuzskom-yazykah> (確認 2020.11.29)

Рыбаков Б. А. [1981] *Язычество древних славян.*, М., Наука.

Сорокин Ю. А. [1988] *Этнопсихоллингвистика*, М., Наука.

Сорокин Ю. А. [2006] «Лингвокультуральные конфликты : ретроспективный анализ», *Вопросы психоллингвистики*, С. 80-92.

Тао Мэнтин, Евдаш А. Ю., Быстрова Т. Ю., [2018] «Сравнительный анализ семантики красного цвета в повседневной культуре Китая и России (часть 2)», *Академический вестник уральшипроект расасн №. 3 (38)*, С. 92-95.

Тараканова Д. А. [2012] « «Символическое» в семантике цветообозначений в народной культуре (лингвокультурологический аспект) », *«Филология»* С. 15-17.

<https://cyberleninka.ru/article/n/simvolicheskoe-v-semantike-tsvetooboznacheniy-v-narodnoy-kulture-lingvokulturologicheskiy-aspekt> (2020.11.29 確認)

Телия В. Н., [1996] *Русская фразеология : семантический, прагматический, и лингвокультурологический аспекты*, М., Школа «Языки русской культуры».

Телия В. Н., [1999] *Фразеология в контексте культуры*, М., «Языки русской культуры».

Фрумкина Р. М. [1984] *Цвет, смысл, сходство*, М., Наука.

Шанский Н. М. [1982] *Этимологический словарь русского языка*. Т. 2. М., «Издательство Московского университета», С.375.

Шведова Н. Ю. [2007] *Толковый словарь русского языка с включением сведений о происхождении слов*, М., «Азбуковник».

伊藤眞 [2007] 「日独形容詞比較研究—色彩を表す形容詞の比喩的意味機能について—」『獨協大学ドイツ学研究』 №58 pp. 79-96

金泰虎 [2015] 「白と黒の色彩からみる日韓文化と社会：言語と観念の色を中心に」 甲南大学国際言語文化センター紀要『言語と文化』 19 号 pp. 121-135

草川昇 [2003] 『語源辞典, 名詞編』 東京堂出版

栗原成郎 [2007] 『諺で読み解くロシアの人と社会』 ユーラシア・ブックレット №104 東洋書店

坂本真樹・内海晃 [2007] 「色彩形容詞と名詞の相互作用による色彩形容詞メタファーの認知効果」『認知科学』 14-3 pp.380-397

社団法人日本流行色協会編 [1991] 『色のイメージ事典』 同朋舎

蘇紅 [2013] 「色彩語の日中対照研究：赤・黄・黒・白の四色を例として対照する場合」 愛知大学中日大辞典編纂所『日中語彙研究』 第3号 pp. 47-62.

<https://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/pdf/word-vol3/03.pdf> (2020.11.29 確認)

千々岩英彰 [2001] 『色彩学概説』 東京大学出版会

唐向紅, 鷺尾紀吉 [2010] 「中国と日本における色彩語の対照」『中央学院大学人間・自然論叢』 31 号 pp.

51-66

時田昌瑞著 [2000]『岩波ことわざ辞典』 岩波書店

戸部又方 [1996]『ロシアの言語と文化』 ナウカ

新村出 [2014]『広辞苑』 第六版 岩波書店

藤井誠 [2010]「色彩語彙に関する一考察」『人文学報 表象文化論』 431 号 pp. 77-88

松村明 [1995]『大辞泉』 小学館

三星宗雄 [2015]「赤の記号」『人文学研究所報』 № 53 pp.39-48

森宏子 [2017]「“白”の意味論」『中国学志』 第 32 号 大阪市立大学中国学会 pp. 1-17

< 文例の検索に利用したサイト >

Национальный корпус русского языка. <https://ruscorpora.ru/new/>

国立国語研究所 現代日本語書き言葉均衡コーパス <https://shonagon.ninjal.ac.jp/>